

## 平成30年度第1回総合事業サービスワーキンググループにおける主なご意見

11月30日に開催した「総合事業サービスワーキンググループ」において、委員の皆様よりいただいた主な意見は以下の通り。

### ① 介護予防・日常生活支援総合事業の実施状況

#### (ア) 生活支援訪問サービス

- ・少しずつではあるが着実に生活支援訪問サービスの利用者が増えている。

#### (イ) 住民主体訪問サービス

- ・国への要望はどうなっているか。

→(事務局)政令市が集まる会議で提案したが、要望に至らなかった。

- ・利用者も団体もメリットが少ないし、補助額も含め積極的に見直す必要がある。
- ・行政がどこまでやるべきか、という問題がある。住民が自分たちの生活を守るために団体を作ったところに、たまたま補助制度が当てはまり、上手くいっているケースもある。1件当りの補助がいくらで、採算が取れるからサービス提供する、という考え方では制度が破綻するのではないか。

#### (ウ) フレイル改善通所サービス

- ・各区1箇所しかないのに送迎が無いことが利用者を増やしていく上で課題ではないか。
- ・各あんしんすこやかセンターに1つくらいあるのが理想的はないか。

#### (エ) フレイル予防支援事業

- ・ひきこもりは男性が多いので、男性を外へ引き出すことが課題だ。「フレイル」の言葉が出てきて4～5年位で、未だ馴染みが薄いことも課題である。

#### (オ) 地域拠点型一般介護予防事業

- ・これからは、地域で格差が出てくるし、意識の差も大きくなってくる。画一的なことをすると届かない人が出てくるので、市はデータを分析し、そういった場所がない所に拠点を作るべきだろう。
- ・成功パターンを整理して、見える化し、みんなで共有してアイデアを積み上げていってはどうか。

#### (キ) その他

- ・ボランティアポイントは活動の動機付けになる。
- ・ポイントはスタートのきっかけにはなるが、続けるためには他の要素も必要である。お礼を言われ、嬉しくなり、ずっと続けているケースもある。
- ・ボランティアと利用者の役割の交換ができる「時間貯蓄」というしくみもある。
- ・ボランティアを受け入れる側も、まずその仕組みを作らないといけない。受け入れを歓迎しても、お互いの思いが一致せず、「ボランティアしてあげたのに」となると駄目である。

- ・画一的に作ったものを地域に当てはめていくのではなく、例えばボランティア活動が活発な地域をまずはモデルとして検証しながら、それをベースに地域に合わせて変えていくのが良いのでは。また、たくさんメニューがあって、選択できることが必要だと思う。

## ② 介護予防通所サービスの利用者負担の見直し等

### (イ) 利用者負担の見直し

- ・極端に短時間のサービスをしているところは、ストレッチや運動だけでは、それが介護保険になじむのかと思う。体を動かすだけなら、ジムへ行けば良い。
- ・通所サービスを利用する目的は、自立支援、閉じこもり、機能の回復等、いろんな要素があると思うが、サービス提供時間が特に短い事業所は、おそらく目標には馴染まないし、チームケアの考え方に、どのようにうまく入っていくのかと思う。
- ・まずは、事業所が現在行っている実績評価レポートについて、利用者の維持・改善状況とサービス実施時間の関係を分析し、短時間だから改善できていない、という因果関係があるのか示してほしい。
- ・見直しが決定すれば、恐らく短時間の事業所が減少していくが、それが将来、介護保険にかかる費用を下げ、健康寿命を延伸することになるのか。後期高齢者が増えた時、独居男性、ひきこもりの人には、短時間のサービスは必要だと思う。その辺りを議論した上で、何割にするかの話になると思う。
- ・極端に短時間の事業所も出てきており、そこに対する考え方はあるだろうが、それでも改善ができていない証拠ができれば、神戸市が求めている介護予防に資するサービスにはなる。